

若者言葉による親密性の形成について —女子大学生の会話を例に—

松橋 那実

はじめに

若者言葉は大学生活の中で自然なものとして受け入れられ、よく耳にする。私たち自身それをよく多用している。自分たちの若者言葉に対して格別な意識を持っているわけではなく、「ムズい」、「キモい」などと言っているが、その言葉がどうして「難しい」、「気持悪い」であってはならないとは考えない。ただ、仲間内ではやっているから使うことがある。しかしビジネス社会では使用されておらず、それを聞いた大人達は、若者たちはわけのわからない奇妙な言葉を使っている、と反感を持つ。それでも若者言葉を使用するにはそれなりの理由があり、若者の使っている言葉が特有の役割を果たし独自の若者文化を形成していることは事実である。問題は話者である若者自身が若者言葉を自然なものとして文化的意味を十分に把握しているか否かである。

同様な指摘が男女間の話し方の違いについて述べられている。会話分析などから会話の違いなどを研究しているアメリカのデボラ・タネンの著書『どうして男は、そんな言い方なんで女は、あんな話し方』では、女性は男性よりも人間関係の結びつきのという視点とらえがちであることを指摘する。相手と自分はどれほど親密または疎遠なのか？女にとって会話は、互いの「親和」を築き、保ち、また示すための手段と言える（2001:25）。男性は人間関係を上下の序列という視点でとらえがちである。相手と自分はどちらが一段上または一段下なのか？男にとって会話は、自らの「地位」を築き、保ちまた示すための手段と言える」と述べている。（2001:24）。

世間では言葉の乱れと指摘しているが、女性が持つスピーチスタイルと若者のスピーチ

スタイル双方に共通するものがある、それは両者においてコミュニケーションの内容そのものではなく言語使用により仲間意識が生まれて親密な関係を構築していることが重要だと考えられることにある。本研究では若者言葉の使用によってどのような機能を持つのか明らかにし、一番身近である女子大学生を対象に女性における若者のコミュニケーションについて社会構築主義や語用論に注目し会話分析を中心に考察していく。

1章ではデボラ・タネンが提唱する発話行為の基本となるスピーチスタイルを説明していき、2章は若者特有のスピーチスタイルの特徴を調べ様々な機能を述べていく。3章では若者言葉が仲間意識を確かめるための道具として関わっている8つの要素を挙げて具体化していく4章ではフィールドワークを行い女子大学生の会話を分析し実際にどのように使われているのか、またどのようにして親密性の形成をしているか検証していく。

1章 スピーチスタイルの定義

会話をすると話が盛り上がりたり、励まされたり、喧嘩することなどで相手の人とダイレクトに向き合い私たちはコミュニケーションに参加する。そして何気なく自然に喋っている行為は他者と仲良くなれる一つ的手段だと日常生活において感じている。

若者言葉を分析するにあたって会話がコミュニケーションにおいてどのような役割を持っているのか、スピーチの技法によってどのような親密性が形成されるのかを、デボラ・タネンの著書『That's Not What I Meant』(2008), 『CONVERSATIONAL STYLE』(2010)を元にスピーチスタイルを考察する。

デボラ・タネン(2006:16)は会話について「Very little of what is said is important for the information expressed in the words. But that doesn't mean that the talk isn't important. It's crucially important, as a way of showing that we are involved with each other and how we feel about being involved. Our talk is saying something about our relationship. (発話されることのごくわずかし言葉において表現された情報は重要では

ない。しかし会話は重要でないという意味ではない。これを示す方法として私たちはどの様にして会話に参加しているのか、またお互いが必要とされているのかを実感できることが決定的に重要なことである。私たちの会話は関係性について何か言っている。)と述べている。

この理由は、言葉の意味によって伝達された情報はメッセージであって関係性についてはメタメッセージ(非言語的意味)によって伝達されるからである。もしも誰かが「怒っていない」と言い、眉間にしわを寄せて怒鳴るような言い方で話すのであればその人が怒っていないというメッセージを私たちは信じるだろうか。ただ単に発話したことではなくどんな意思で述べたのか、なぜそのように表現したのかというのが会話のメタメッセージにおいて返答され重要な役割を持っている。

私たち多くは重要な話を伝えない話(公共、社交場での中身のない話また意味のない美辞麗句で飾った言葉づかい)は価値のないものと片付けてしまう。話を飛ばしてポイントだけを聞きとることや「なにを意味しているのか言ったらどう？」というような忠告は道理にかなっている。しかしもしも実際に人々が話す態度がそっけないとお互いが感情的に関わり話すことがお互いの確認し合い、監視したり、支持したりといった人間関係のバランスを取るにあたり主流な方法となっている。一方言葉は情報を伝えることも重要だと述べている。どんな言葉話すのか、大きさ、速さ、イントネーション、強調など様々なシチュエーションで使い分けている(例えば相手をからかう、懲らしめる、説明する)。私たちは親近感を持つことやいぶかしげに感じることで身近なのか疎遠なのかを受け取りたい。言いかえれば私たちが口に出すことをどのように言うかで色々な社会的意味が伝達される。言葉の定義は辞書には存在していなく聖書のように絶対的なものとして考えている。言語は言葉を提供し、コミュニケーションの過程を表現し見ること、話すことを、私たちが思うことを可能にする。

(1) 個人思考と集団思考

私たちは地域社会の中で他者と密接にすることが必要である。世界で一人ではない。しかし自立を保つためにお互いの隔たりを保つことも必要である。この二面性は人間のコンディションに反映し、私たちは生き抜くために他の人々を必要として、しかも個々で生き抜いていきたいと思っている。ここでジレンマが生まれている。

私たちは個人思考と集団思考のそれぞれの必要性をうまくバランスをとって維持してい

る。しかし個人個人他の地域によって価値観が異なっている。アメリカでは個人思考を特別に重視している(特に男性)、これと真逆に西ヨーロッパでは家族や仲間と集団思考を重視している。集団の価値は個人の価値と関係づけられていて多くのアメリカ人(特に男性)は特に自分らの個性を重要視していて社会の集団の必要性を必要としていない。

男女においても思考が異なっている。男性はニーズがあると見込むこと、夢中になっていることとなんでも情報を交換したい、言いかえれば本当に必要なことしかしゃべらない。しかし女性の場合は相手と接触しつづけるおしゃべりをしたい。男性はビジネスの場面で情報伝達の方法として会話はシャープで問題の核心に触れることがすぐに可能で“時間を浪費しない”短い会話をする。短い話は社会関係を構築しビジネスの成功することと必要性がある。一方女性は重要な情報を伝えるためには会話の長さなしでは軽薄だと感じネガティブな固定概念を持っている。親密な友情関係を保つためにお互いの会話を維持できる能力を持っている。デボラ・タネンの著書に登場する、ワシントンポストの Richard Cohen は男性同士が友達を持つ感覚を知らないことに気付いたと述べている (2006:21)。たぶん少なくとも彼らが会話において本質的なトピックを考えることができない、なぜなら彼らはお互いに会話をしないからで結果として多くの男性は個人的な接触を持たないで彼ら自身を見付け出している。

よって私たちは人とのつながりを持つことそして距離を置くことを上手くバランスを取るために個人主義と集団主義が必要であることがわかる。言葉を発話する一瞬一瞬において両方の必要性を共有しなければならない。誰とでも他の人と関係づくことを示すのは個人思考を脅かし、また誰とでも距離を置くことを示すのは集団思考を脅かすと思うかもしれないが矛盾はしていない。どちらを選択するか迷うことであって1つのことについて2つの感覚を持ち、それが2つの二重拘束である。なぜなら必ず他者の良心に背くことが1度は必要であるからだ。個人思考と集団思考のバランスを保つために、礼儀正しさの現象として私たちの会話が理解できるように調節している。(同上 2006:18-26)

(2) 会話における「情報」と「礼儀」の基本的概念

タネンによれば言語学者の H.P.Grice は情報についてコミュニケーションのルールをいくつか決めることがき、伝達されるポイントを成文化している。

- ・必要なことを言う
- ・真実を言う

- ・ 関連性のあることを言う
- ・ 明確性のあることを言う

聞き始めて実際の会話について考えるまでこれらのポイントは完璧な感覚の構成であると述べている。しかし、もしもこれらの価値に賛成できるならば私たちが意味することを単にうっかり口に出すことはしたくないだろう。なぜなら私たちは個人思考と集団思考を場面に応じて上手く切り替えているからである。

社会目的の広い概念は言語学者や人文学者によって“ポライトネス”と呼ばれている。この観念はうわべだけの気取った考え方ではないが深い良識は他者が言うことに注意を払わなければならない。(同上 2006:22)

また、言語学者の Robin Lakoff はポライトネスに関連する新しいルールの特徴を述べている。

1. 距離を置く、軽くお断りをする
2. 選択を与える
3. フレンドリー：友情を保つ

3の仲良しは集団意識の必要性の供給によって他者が満足する。1は押し付けないことによって個人意識の必要性の供給によって他者が満足する。2は1と3の間に位置する。これらの3つのルールを共通の会話を通してそれぞれの働きをについてタネンが例を挙げている。

〈例〉喉が渴いていて何か飲み物がほしいシチュエーションで「何か飲みたいですか?」と聞かれた場合、どのように返答するのか。

初めに1のルールで考えると、たとえ喉が渴いてしたとしても「いらないです」とお断りを入れる。社会は多少であってもこのような社交辞令の返答を期待している。そして言ったあと再度本当に飲み物飲まなくていいのかどうかを尋ねてくれることを要求する。距離を置いて押し付けない表現はこのポライトネスを予期して最初の申し出を快く受け取るととてもあつかましいと思われてしまう。逆にポライトネスを期待しなかったら拒絶した言葉意味をそのままに受け取ってしまうだろう。

次に2のルールでは「あなたが飲んでいるものが欲しい」という表現を使って自分が飲む飲み物を質問した相手に決定させる。もしもこのように返答したけれども最初の申し出を断ることを期待してあつかましく思うかもしれない。3のフレンドリーさを期待していたとすれば優柔不断と思うのかもしれない。

最後に3のルールの場合では「リンゴジュースが飲みたい」と自ら飲みたいものを頼むことや自分で冷蔵庫を開けて「ジュースある?」と聞いてくる。もしも両方が適切と思うならば親密な関係を強くすることができる。“私たちはとても良い友達だ”とメタメッセージを送っていて礼儀正しい態度を取る必要がない。しかし同意がなければ友好的な関係にはならない。(同上 2006:23-26)

このように、質問を投げかけた人がルールの1、2、3のどれかに当てはまるかによって感じ方が違い三者三様で人によって感じ方が様々なことが理解できる。もちろんこれらは本当のルールではなく、感覚として会話をするにあたって自然に使っている。

(3) 会話のさまざまな合図

口を開けて何かを言うとき私たちはただ話しあっているように感じているが何を言うのか、そしてどのように言うのかたくさんの可能性を並べて選んでいる。そして選んだものが相手に作用する。人々の性質や出来事に応じて態度についての印象を与える。例えば3ピースのスーツを着ているとその場面では堅苦しいや敬意を表す合図をしている。またジーンズを着ていると真面目で会話をしない合図を送っている。それぞれの個性はフォーマルやカジュアルのように堅苦しさをだらしのない態度もまた会話の手段としての合図を持った

タネンは他にも声のトーンやスピード、イントネーション、声の大きさとさまざまな方法があると述べている。話す前に何を言おうかよく考えることを意識することもあればしないこともあるがどのように言うのか意識して考えることは状況が明らかに判断できる場合を除いてはめったにない。そして、コミュニケーションスタイルほど余計なものではなく会話の基本的な道具である。これらの合図は会話の効果として発揮し言語表現として発揮する。話す順序を考えながら会話を創造していきお互いが持っているアイデアをどのように見せるのか、私たちが会話をしていて何を相手に対してアプローチしたいのかを表す(例えば、何かを提案する、助けを求める、興味を持つなど)。そして会話をしている時間はどの様に感じているのか明らかにできる。(2006:36-38)

そして会話の中で発話行為だけではなく齋藤(2004:78-98)はコミュニケーションを円滑にするための、身体に関する基本原則4つ挙げている。

1) 目を見ること。目を見るということは相手の存在を認めているということであり、そうすることで言葉が伝わりやすくなる。しかし、あまり目をじっと見るのは好ましく思われぬこともある上にじっと見つめることは威嚇と捉える危険性も含んでいるので、注意が必要である。

2) ほほ笑むこと。軽くほほ笑むことは相手を受け入れるサインである。普通人は話すとき、自分が受け入れられているかを気にしているので、会話の途中でふっと漏れるほほ笑みは場を和ませる効果がある。

3) 頷くこと。頷きは相手の話を聞いているというサインであると同時に、感情的に話し手を受け入れているというメッセージを持っている。頷きは相手の意見に同意・同調する傾向があるが、それは絶対的なものではない。そのため、意見に賛同しなくとも頷いてから反対の意見を述べることも可能である。

4) 相槌を打つ。相槌は話の流れを良くする潤滑油のようなものであり、相槌により相手は話しやすくなる。相槌は相手の話に同意する意思を示す言葉であるが、頷きとセットになることが普通であり、こちらも相手の話に同意するかについて絶対的なものではない。

ただし、デボラ・タネンが指摘するように親密性の形成を可能にするコミュニケーションは国によっての多少の差異があり、個人個人とはいえ、それが対人関係によって多大な影響をもたらす何を重要としているのか異なっている。次の章では同様に若者独自のスピーチスタイルがあるとすればそのような特徴はどのようなものなのか。スピーチスタイルが会話においてどのような効果があるのか調べてみたいと思う。

2章 若者言葉のスピーチスタイルの効果

現代の若者のコミュニケーションの特徴として、若者が相手と正面から対峙してコミュニケーションを行う・対人関係をもつことを嫌う・恐れる・苦手とするようになってきている、という傾向がある。例えば、どんな局面でも当事者にならず第三者＝《モラトリアム人間》でいることを望む(小此木 1978)、競争原理を忌避する《やさしさ》指向(栗原 1981)、対人関係に適応過剰・不能を示す《コミュニケーション不全症候群》(中島 1991)、

他人と一線を引いて衝突を避ける《マサツ回避の世代》(千石 1994)、互いを傷つけないことに過敏な《やさしさの精神病理》(大平 1995)、等々言われている。

こういった若者像の最もネガティブな極にあるのが「人間本来のコミュニケーションが苦手で、自分の世界にとじこもりやすい」とされるいわゆるオタクである。このオタク的若者像は、89年に連続少女誘拐殺人犯として逮捕された「オタク青年」が大量のビデオテープを所蔵していたことから、稲村(1986)が《機械親和性対人困難症》と呼んでいた若者像とも結びつけられ、メディア・情報環境の発達との関連で盛んに語られるようになった。

しかし若者にみられるのは、対人関係の切断という単純な自閉傾向ではない。中高生を対象としたNHK放送文化研究所の調査(謝名元 1988)は、この点について一つの興味深い結果を提示している。それによると、親友であっても「心の深いところは出さなくてつきあう」と答えた生徒が中学生で25.5%・高校生で22.5%、「ごく表面的につきあう」と答えた生徒が各17.5%・7.7%となっており、両者を併せるとそれぞれ40%・30%を超えるのである。また別の若者調査(対象19~22歳)でも、「親友に対しても自分のすべてはさらけださない」という割合は52.2%にまで上っている(博報堂生活総合研究所[1994a:42])。

どうして消極的になるのかという対人関係を強く結ぶことによって相手を傷つける・相手に傷つけられることや対人的な煩勞から逃れ難くなることを忌避する性向だろう。そして対人意識の変化はコミュニケーションの行動にも影響を及ぼすだろうと考えられる。図1は友達とのコミュニケーションを円滑にする(維持する)ために必要だと思うこと(10選択肢から複数回答)の上位5項目を抜き出したものである(博報堂生活総合研究所[1994b:88])。

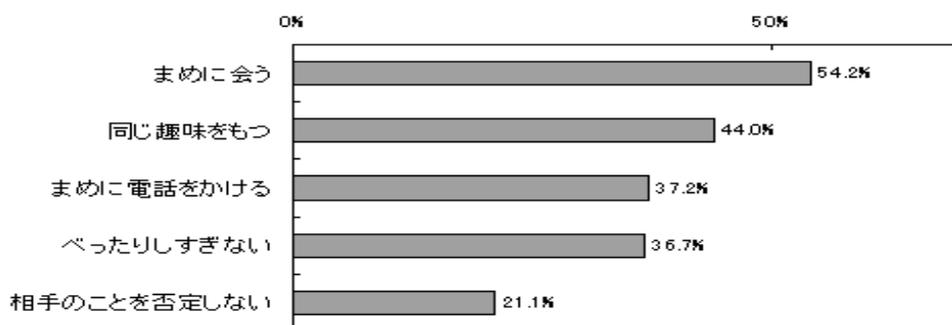


図1 コミュニケーションを円滑にするために必要なこと

「まめに会う」「まめに電話をかける」などは、対人関係そのものへの積極性に対応するものと、「べったりしすぎない」「相手のことを否定しない」などは、その相手と強い・濃い対人関係をもつことへの消極性に、それぞれ対応するものと考えられる。こういった対人コミュニケーションへの態度は、近年若者のことば遣いの端々にすら見受けられるようになった。例えば「辞書とか必要ですか？」や「ミーティングとかやるんですか？」と言われるような「とか弁」が若者の間で言い回しの節々に、相手との対立を避けたがる表現が目立つ。その代表格がイエスの代わりに言う「そうですねえ」とノーの代わりに「～って言うか」を使用している。

辻(1996)によれば、若者語については、ことばの乱れとしていわば語彙論・統語論的な側面でとりあげられること(「ら抜き」ことばなどは記憶に新しいところだろう)や、不可解さ・ナンセンスさといった意味論的な側面でとりあげられることが多かったが、近年は言語使用の対人関係的な側面＝語用論的な側面でとりあげられることが目立つようになってきたと述べている。

これらの言葉は一般的にも用いられるが、若者言葉としてとしてのそれらは趣を異にしている。例えば「東京行って街をぶらぶらするのが好き」と言えば済むところを「東京とか行って街とかぶらぶらするのとか好き」と言う。意味的にはゼロの内容しか持たず、専らその役割を対人関係的・語用論的な機能に偏らせた若者語が登場したのである。これらの若者語は、対人関係的な側面においてどのような方略をもつものであるか？次に、この点についての分析した研究を見ていく。その点で重要であるのは発話行為論における問題と意味の多様性である。

ことばとは、それとは独立に存在しているできごとやものごとを表す(represent)ものである。こういった考え方は現在でも一般通念に近いものだろうし、発話行為論以前の哲学者もほぼ同様の考え方をしていた。例えば、「雨が降っている」ということばはある特定の天候のことを表すものである、といった具合である。

しかし、ことばにはこのような捉え方からでは見落とされてしまう側面がある。それを初めて明確に指摘したのが、言語哲学者の J.L.Austin (1962=1978) だ。「私は

禁煙すると約束します」ということばを例に取ろう。この禁煙の約束は、予め存在していた・または未来に存在するだろうできごとを表すものではない。今まさにそのことばを発することにおいて“禁煙の約束”というできごとが生み出されたのである。別の言い方をすれば、そのことばは約束を生み出す一つの行為、あるいは約束という行為そのものである。

ことばは、それと独立に存在するできごとを表す『意味(meaning)』の他に、一定の行為を遂行する『力(force)』(=発語内の力 illocutionary force) をもつ。これが Austin のなした言語観の転回点である。この力はそのことば(発話)がどのような行為ととられるべきかを示すものとされるが、見方を換えるなら話し手と聞き手の間にある対人関係を設定する力と考えることもできる (Habermas 1976)。先の話し手が禁煙の約束を破って一服しているところを聞き手が見つけたとしよう。このとき、聞き手はそれを正当に非難することができよう。それはいわば契約不履行に類するようなものだからだ。つまり、「...約束します」という発話によって話し手は聞き手に対して責任を負うことになり、それによってある種の対人関係が取り結ばれることになるのである。

以上をふまえた上で辻(1996)の研究は若者の発話行為について述べられている。具体的な2つの会話のもとに若者言葉を分析していく。

I

A あの服どうかなあ

B 私は好きじゃないって感じ

II

A あの教授の授業楽しい?

B 超眠いみたいな

ここで感じることは「好きじゃない服」、「眠い授業」ではなく「好きじゃないって服」、「眠いみたいな授業」どういう服・講義のことなのだろう? ここには何がしかの違和感がつきまとう。しかしこれらの表現を次のように考え直すならば、違和感はいくぶん解消されるのではないだろうか。

『好きじゃない』って感じの（ことばがあてはまる）服」

『眠い』みたいな（ことばがあてはまる）講義」

この観点から、先のように考え直された（“使用”ではなく“言及”と考え直された）「私は好きじゃない、って感じ」「超眠い、みたいな」を分析してみよう。発話者は一旦、素のまま「好きじゃない」「眠い」と述べる。その後、一拍おいて「って感じ」「みたいな」を付け加えることで、その述べたことについて述べるメタレベルの立場に身を翻すのである。このとき、「って感じ」「みたいな」は、直前のことばを括弧に入れ、それを“使用”から“言及”へと、発話者の発話地点を素のレベルからメタレベルへと転調させる（Goffman 1974:40-82,251-69）機能を果たしている。

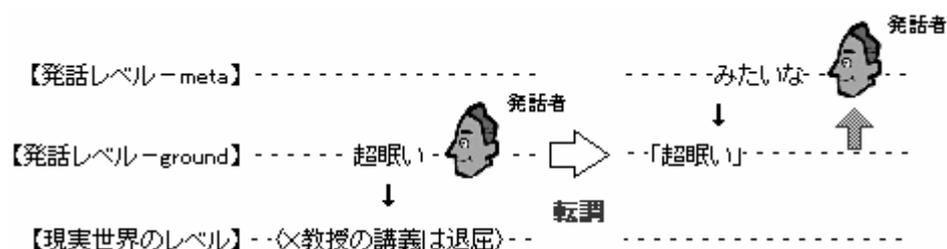


図2 発話行為の転調

辻(1996)を引用

図2で表したように「私は好きじゃない」「超眠い」という発話によって設定される対人関係への関わり合いを、発話者は「って感じ」「みたいな」を付して転調することで間接化する。この点において単なるコミットの緩和とはやや異なっているように思える。

このように若者の発話行為は対人関係の設定に聞き手の加担を引き込む方略と考えられる。若者語が関わり合うことによって緩和された（あるいは間接化された）・責任の分担された発話によって、人間関係を維持していくために対人関係における「マサツ

回避」、「やさしさ」が仲間意識を持ちたいというあらわれであり若者の会話スタイルに定着している。

そして若者の発話行為のだけではなく米川（1998）は、言葉はどのような目的で使用され、どんな役割を果たしているのかをコミュニケーションにおいて様々な機能を持っていると述べている。特に親密性を構築するための重要な機能が3つある。

1) 娯楽機能 若者語を使って会話に笑いを生じさせ、楽しむ機能である。例えば同姓ばかりになるとトイレに行きたい時の表現として「膀胱が破裂しそう」と叫んでトイレにダッシュする光景を見たことがある。若者は会話を楽しむために会話をする傾向が強い。そのため面白い話題を選択するだけではなく、面白い語を造り使って楽しんでいる。これは笑いを生む大切な機能で言葉遊びというと軽視されがちで、語学研究でもその傾向が強いが言葉遊びは批判精神を伴い、言語に活力を与える重要な働きを持っている。

2) 会話促進機能 娯楽機能をさらに進めて若者語を使って会話を盛り上げたり略語を使ってテンポを良くしたりする機能である。娯楽機能と同様に会話のノリを求める若者にとって最も重要な機能を持っている。

3) 連帯機能 砕けた若者語、仲間内の言葉を使うことによって親近感を持たせ、ウチの人という仲間意識を強める機能である。

例 A 「おなかすいたなあ。なんか食べに行こうよ。」

B 「給料も入ったし、なんかいいもの食べに行こうよ？」

A 「本当？じゃあ今日は B のごち？」

B 「何言ってるの」

「ごち」は「ごちそう」の略語でおごることを意味している。「ごち」と言える仲間がいて、また「ごち」を使うことによって変わらぬ間柄であることが確認され、さらに仲間意識が強化されていく。これとは逆に若者語は仲間以外の者を疎外する機能を持っている。連帯機能とは表裏の関係にある。

若者語を使用する最大の要因が「面白さ」であり、この面白さは語や言い回しの事態の面白さだけではなく場・仲間・タイミング・インパクトの要素が揃ってはじめて成立する面白さである。仲間と言っても顔と名前を知っている程度ではだめであり自由に話せて漫才の間のようにちょうどよく話せる仲間でなければならない。

3章 仲間意識を持つ要素

若者言葉と表現するにしても様々な表現方法がある、語彙の構造が対話をする際、気づく部分ではあるが、口調やイントネーションや発音する音声にも特徴がある。

単に他の人が使用していない言葉を使っているということはその仲間の間に仲間意識が生まれると考えられるだろう。若者言葉を使用する人たちの間にも同じことが言えるのではないのだろうか。山口（2007）は若者言葉を使う最も大きな目的は「仲間意識を持ちたい」の一言に尽きると述べている。この目的が、若者言葉を使う意図の根底に大きく横たわっている。特に省略語は仲間以外にはわかりにくく、仲間以外にはわかりにくい。そうすることで仲間と仲間以外識別が容易になり、どんどん輪を小さく、濃密にしていくことができる。つまり、小さな仲間間にしか通じない省略語ほど連帯感の高める機能を持っている。

省略語を含めて様々な機能持つそれぞれの特徴を会話分析で検証するため語彙レベルの要素と口語レベルの要素と大きく2つに分けてみる。

1. 語彙レベルの要素 強調表現

「めっちゃ」「超（チョー）」「すごい」「かなり」「マジ」などとたくさんの言い回しがあり、地方や個人によって使用するものが異なっているものである。

若者たちは、多くの場面で強調語を使用し、いったい何を強調しているのだろうか。山口（2007）による調べには、9割余りが「気持ち」を表している。

「めっちゃ楽しかった」「マジむかつく」「マジ嫌だ」「超悲しい」というぐあいに、「楽しい」「むかつく」「嫌だ」「悲しい」などと感情を強調する場合は45.8%「超きもい」「メッチャ可愛い」「普通にかっこいい」に見るように「きもい」「可愛い」「かっこいい」と評価を強調する場合は33.3%「マジ眠い」「めっちゃ寒い」のように「眠い」「寒い」などと感覚を強調する場合は12.5%という調査結果が出ている。

「感覚」はさまざまな気持ちであり、「評価」も気持ちの一部であるので若者たちが強調しているのがほとんど自分たちの気持ちを伝えている。

米川（1996）は会話のノリを楽しむために若者は大げさな表現が多く使われていると述べている。「死ぬ」系の言葉を使用していることが多くみられる。

・死ぬほど

A「今日暑いね!」

B「本当だ、死ぬほど暑いよ!」

・死ぬ

A「私、今日テスト2つもあるー!」

B「死ぬなあ」

A「うん、死ぬ! 死んでるわ」

(1996 : 167-168)

強調語はとどまることを知らず、ますます過激になってきている。並の表現では何にも感じられなくなってきているのだろうか。世間に出回っている宣伝・広告を話半分しか聞かなくなっている私たちは並の強調では驚かなくなっている。これを感じている若者は、より過激に言わなければならないという強迫観念にでもとらわれているかのように過激さで大きさに表現するようになってきている。

加藤(2008)によれば、強調語はとても(very)という表現だけではなく若者言葉において「普通」は、「普通に良い」のように、一定基準を満たしている、または特に問題が無いことを表す肯定的な言葉としても使われる。例えば、言葉のジェネレーションギャップを歌い上げる『これってホメことば?』という歌にも「フツーにおいしい」という表現が取り上げられている。また、「平然と-を行う」、「当たり前のように-を行う」という意味として、「普通に-を行う」というように「普通」を使用する者も増えている。

2. 断定を避ける表現

「みたいな」「一応～」「的」と言ったような「遠回しの表現」と「ぼかし表現」2つの機能がある。遠回しの表現に挙げられるものとして、「微妙」が使われる。これは良いか悪いか判断がつかないときに使い「良い」「悪い」の中間というよりは、良いとも悪いともいえない場合、良いとも悪いともいえる場合、または、人によって判断が分かれそうな場合に使われる表現時に、否定するのがはばかられる場合、婉曲な表現として用いる。

またぼかし表現は物事をはっきりさせなかったり、自分の所在を明確にせず、第三者に見立てた表現であり、例を挙げると「一応」、「かも(知れない)」、嫌や、やりたくないという意味で使われる「無理」、「～だよな?」と同調を促す「～くね?」、「とか」、「みたいな」、「的な」「なんか～」がある。

また好きな話など話している際冒頭で「でも～」をつける事がある。例は、「でも好きかも知れない」、「でも楽しかったよね」などともに楽しい話題を話している時に否定の「でも」を使う。この「でも楽しかったよね」の表現は実体験で、妹とコンサートに行ったときに、終演後色々この曲が良かった、格好良かったなど良いことしか話していなかったのに「でも楽しかったよね」と口から出た。これは、自分は十分に楽しかったけれども相手は自分ほど楽しくなかったのではなかったのではと推測して「楽しかったね」と断定しないで否定の語句を用いてぼかした表現として使ったのではないかと考える。

3. 省略表現

これは語句の一部を省略する方法である。米川(1996)の研究によると省略のパターンがいろいろな種類がある。

方法	例
上略	(ハイ)ヒール、(しら)ぼっくれる
中略	きも(ち悪)い、けば(けばし)い、 むず(かし)い
下略	おそろ(い)、知ったか(ぶり)、キャラ(クター)
複合語の各要素の下部を省略	いた(ずら)電(話)、日(焼け)サロ(ン)、 かて(い)教(師)、スノ()ボー(ド)
複合語の前項要素の下部と後項要素の上部を省略	バラ(エティ-)(アイ)ドル
複合語の後項要素の下部だけを省略	ラブホ(テル)、自己中(心)、朝一(番)
文や句を省略	吉(野家の)牛(井)、路(上で)チュー(する)

なぜこんなにも省略された語が使われているのかと言うと3つの要因を挙げる事ができる。第一は現代社会のスピード化である。現代はあらゆる面で効率よく大量に物事こなすことを求める時代で、話し方も早くなるのは当然だと言える。若者は特にその身体的若さゆえに上の世代よりも早口で話すだけではなく、言葉を省略して会話のスピードを速めた。スピードがあることやテンポが良いことは、彼らの会話に必須条件だからである。

第二は言葉の浮遊化である。現代社会は自由に求めてきた。その結果、個人の自由が拡

大した一方で自己を含めてあらゆる事柄の意味が曖昧になり、あるいは範囲を失いアイデンティティを失った。そこから事柄を言葉で表現するのが困難になった。また仮にできたとしても意味ははなはだ曖昧で浮遊している。そういう言葉は軽く、扱いも軽い。そこから言葉はどんどん省略されていったと考えられている。

第三に言葉の娯楽のためである。若者言葉は会話を楽しむために使う。従って既存の話だけでは会話は盛り上がりせずに「ノッ」てこない。単語や句、文を省略し、従来の語とは違った語形(音)を造ることによりおもしろさをだし、会話を促進させていると考えられる。

4. 動詞の派生—“る”ことば表現

動詞化する接尾語「る」をつける方法で、どんな言葉にも付く特徴がある。「タクシーに乗る」を「タクる」、「愚痴をこぼす」を「グチる」、「頭がパニックになる」を「パニックる」と言ったように述語動詞を“る”で代行させて短くさせて簡潔に表すことで会話のテンポを良くしており、会話促進に一役買っている。

5. ラ抜き言葉表現

「見ることができる」、「食べることができる」は「見られる」、「食べられる」といわれていたが、最近「見れる」「食べれる」という言い方を耳にする。ラ抜き言葉によく使われる動詞は、日常よく使われている動詞であり短い動詞に多い。

ラ抜き言葉が世の中に広まった原因として井上(1996)は、可能の言い方との区別ができること述べている。可能の言い方との区別とは受け身としての「見られる」と可能としての「見られる」で区別ができてことばの明瞭化に向かう言語変化といえ便利である。

井上(1998)の『日本語ウォッチング』において広まった理由について、以下は井上氏の観点をまとめてみた。従来、助動詞の「られる」には受け身、尊敬、可能、自発と4つの意味がある。「見られる」や「食べられる」という言葉を聞いたり読んだりした時、その4つの中のどの意味になるのか判断しなければならない。

例えば、

「彼は熊に食べられた」←受け身

「先生はそのお菓子を食べられた」←尊敬

「私は納豆を食べられる」←可能

「私には、それは正しいことのように思われる」←自発

しかし、曖昧になってしまう恐れもある。例えば「先生はその料理を全部は食べられなかった」の場合では、尊敬の表現か可能の表現なのか判断がつかかねる。一方、ラ抜き言葉を使用すると、可能の意味を専らラ抜き言葉で表現し、尊敬の意味では相変わらず「られる」で表現されるので、曖昧さが解消される。つまり上の例そのままだとすれば尊敬の意味になり、可能の意味を表したいのならば「先生はその料理を全部は食べられなかった」になる。このように、尊敬と可能を区別することができ意味の明瞭化が実現できる。

6. 口調から見る要素 平化アクセント表現

アクセントは日本語の正書法では書き表されないため、これよりアクセントの高いところに傍線を引いて示していく。

平板アクセントを使用する人は、その道の通というか専門家に多そうなので「専門家アクセント」とも呼ばれている。バイクに乗る人は、「バイク」と言いコンピュータに詳しい人は「ファイル」と言う。部活動のバレーボール部を例にすれば、「レシーブ・スパイク・セッター・アタック」といったように普通の人は平板アクセントでは発音しない。初心者が入部すると最初は「レシーブ・スパイク」と起伏型で発音するが、だんだん平板化するようになる。このような現象は外来語以外でも見受けられ、「電車」、「映画」などの言葉は今では平板化が主流となっている。

井上(1998)によれば、ある分野の人は、他の人に比べてその専門分野の外来語を頻繁に使う。平板化された外来語は、その人（集団）にとって親しい、当り前の単語だという意味を持つため、平板化された外来語が頻繁に使われるようになる。専門用語をどのアクセントで発音するかで、メンバーの仲間意識がわかることになる。同じ平板アクセントを発音すれば同じ仲間だが、別のアクセントを使用すると異質扱いされ、アクセントが「集団語」の役割になる。また平板アクセントはさらに便利な面があると提唱し、平板化アクセントの音響パターンは、文を自然に発音したときのパターンにも似ており自然に下がって発音するため、聞いていても耳障りに聞こえない。つまりアクセントがわからない語は平板化にしておけばごまかせるという利点がある。さらに平板化アクセントでは、どこから下がるかを単語ごとに個々に覚える必要はない。最近では外来語が増え、しかも聞きなれない専門用語が増えている現代においていちいちアクセントを覚えることはやっかいであり、外来語のかなりが平板化になれば、一つ一つ覚える必要がなく、地方出身者や外国人も助

かり、ラ抜き言葉が完全に普及すると日本語文法が単純で覚えやすくなるのと同じ事情だと述べている。

7. 尻上がりイントネーション表現

イントネーションと言われるものに「尻上がり」「語尾上げ」「昇降調」と名付けられたもの(「それでえ、わたしがあ」などと表記されるもの)さらに「半クエスション」「半疑問」「文中疑問」と言われるもの(「確認? みたいな」という調子で使うもの)が存在する。

アクセントとイントネーションは、ことばを発するときの声の高さにかかわるという点では共通している部分だが、アクセントはが単語の区別にかかわるものに対して、イントネーションは文の表現にかかわるものであるという違いがある。

「尻上がり」といわれるイントネーションは「それでえ、わたしがあ、言ったらあ」と表記されるようなしゃべり方で文節の最後を急に上げたあと下げる。このイントネーションが広まった要因として井上(1998)によるといろいろな理由があり、「今ネ、家にサ、帰るヨ」などのネサヨのかわりに生じたという説がある。「それでサー、見たらヨー」などと荒っぽい言い方をやめようという運動だった。また米川がこのイントネーションを使った実例を集めて、使っていない例と混ぜて東京の学生に聞かせたところ、使ったときには「かわいい」「甘えている」など以外に「押しつけがましい」などの漢字を与えることがわかった。さら色々な話し方を聞かせて実験してみるとこのイントネーションを使うと実際よりも若く聞こえるという結果になった。

8. 半疑問イントネーション

若い女性に多くみられていて、単語の最後を上げて一呼吸置くしゃべり方で自分自身のことなのにもかかわらず、「きのうゆりかもめ? に乗ったらね」のように言う。慣れないと質問されたかと思って、うなずいたり、「エー」「ハイ」「ウン」などとあいづちを打ってしまう。慣れた人だこのイントネーションに対しては相手の目を見るという反応を示す。

井上(1998)は半疑問イントネーションを使用している人に聞いてみると、相手に通じているのか不安な時に「確認? みたいなあ」という感じで言う。「ゆりかもめって、知ってる?」などとあからさまに相手の認識を聞かなくてもいいので利便性がある。「知ってる?」「わかる?」などとはっきり言葉に出すより、丁寧な(婉曲な)感じを与える。またあることを話しながらその理解を相手に別の言葉で確かめるよりも、時間的には節約できて有効

と考えられてこれが広がる原因だと推測している。また、このイントネーションは、英語から入っていたという可能性がある。初期の使用者が知的職業の女性、留学経験者に多いこと、アメリカ在中の日本人が良く使うこと、また帰国子女のための国際高校でよく使われるなどが根拠という。また半疑問イントネーションの用法や発音の仕方は、オーストラリアで1970年代に広がった「オーストラリア疑問イントネーション」といわれているものに似ていて、アメリカやカナダの若い女性の使う「アップトーク」(up talk)と共通である。

「フォリナトーク」(foreigner talk)とって、話し相手が外国人のときには、分かりやすいように単純化したことばを使うことがある。やさしい単語と文法を使ったり、ゆっくりはっきり発音したり、繰り返したりする以外に相手の理解を確かめるために単語の末尾を上げて反応をみることがある、半疑問イントネーションと同じことが言える。

尻上がりイントネーションも半疑問イントネーションも声の上昇を含む点が共通である。下降イントネーションは文の末尾で話し相手の断定・叙述の気持を表すのに使われる。上昇イントネーションは一般的に相手への働きかけを示すといわれている。文の末尾で上げれば普通では疑問文と受け取られ、単語の末尾で上げるのは相手への確認と受け取られる。尻上がりイントネーションと半疑問イントネーションは相手の注意を引こうとする点で似ている。この効果があるからこそイントネーションが使われている理由といえる。

口調に関係する技法をみてきて、最近のアクセントとイントネーション変化をみてこの二つは密接に絡み合っている。アクセントとイントネーションはともに音の高さを利用するものである。方言を含めて日本語アクセントの長期的変化傾向をみると、京都式の複雑なアクセントから東京式のやや単純化されたアクセントに移行し、さらに区別を失って無のアクセントなるという大きな変化方向が指摘されている。同時に近代の日本語でアクセントと機能が変化しつつあるともいえる。アクセントは単語の識別にも使われ「橋・端・箸」「雨・飴」など同音異義語の区別にも役立っている。このような変化もあって日本の単語アクセントは機能を変えて平板化しつつあり、その一方で文のイントネーションの機能が拡大している。イントネーションには幼い時に身に付く面もあるが、成長して以降も周囲の人をまねて新しい技能を学ぶことも可能である。尻上がりイントネーションや半疑問イントネーションが今広がっているのも、若い女性に特に多い。イントネーションには、伝えたいことを強調する機能があり上昇調はポーズ(休止)と同じで、単語を際立たせる役割を持っている。上手に伝えるための談話として使いこなせば有用で相手にはたらきかけ

るには便利なものと言える。

4 章 会話分析による検証

会話分析は山田(1995)によると「会話」分析と言っても研究の対象は「会話」にあるのではなく社会的相互行為にあり、会話分析は言語学だけではなく、文化人類学、社会心理学、認知科学など様々な分野において議論されている。

そして分析に用いる大学生の日常会話は、一見でたらめに各個人が好き勝手に話しているように見えるが社会的相互行為学の観点から見る場合、実は決まった法則がある。山田(1999)は、日常会話を以下のように定義している。

- ・ 授業や会議などではなく、会話参加者にほぼ同等の発言権が与えられる状況である
- ・ 一度に一人が話す
- ・ 話し相手の交代が何度も起こる

山田はこういった会話を分析することで、会話がなされる実際の文脈の特徴を考察しながら、同等にその文脈を超えて一般化することが可能であると述べている。したがって、会話分析の結果から、具体的な会話がなされた状況を細部まで詳細に説明できるようになる。

－分析方法－

女子大学生を調査の対象として2人以上で会話をしてもらいヴォイスレコーダーを用意し大学校内やレストランで録音する。また録音ができない場合はメモ用紙に速記し、実際に女子大学生が若者言葉の特徴を使っているのか調査しました。分析するため一語一語を文章化する。また文章では表すことができないイントネーションの上がり下がりや口調を「↑」「↓」で表すことにする・

〈会話 1〉

他大学生3人グループが喫茶店で親に友達の家泊まるという理由で彼氏の家泊まる内容を話している場面。

- A また親に内緒で泊まりに行くさ
- B なんて言った？友達ん家っていうんだっけ？

- A 友達ん家に… そのままバイトに行ってくる
- B それって言及されないの？どこの友達？誰？とか
- C うちめっちゃ言われる
- A 最初めっちゃ言われてたけどめっちゃキレたんだよね
いまどき聞く？みたいな…
二十歳超えてんだからこっちの責任じゃん(↑)みたいな
て逆に友達の立場で
なんか友達の親が電話とかかかかってきたらすごいウザい
と思うんだけどみたいな…
- B すごいんだけど
- A 親心配するのはわかるけどなんか友達に立場になったら
フツーにウザいからみたいな…
- C そんなこと言えないよ
- A (親に)考え方が古いんだよって言ってみたいな
- B そしたら？
- A はあ？ みたいな

この会話のケースはAが圧倒的に話題の中心になりBとCはAの話す内容にリアクションを返している。特に話し手であるBは「なんて言った？ 友達に言うんだっけ？」や「それって言及されないの？ どこの友達？誰？」とAに問いかけることによってAを次の話し手として選択している。これは山田(1999)によると他者選択：Current-selects-next規則性が生まれ、もし今の話し手(Current speaker)が次の話し手(Next)を選択(Selects)したら、今の話し手は話すことをやめて、次の話し手が移行適切場で次の発話順番を獲得する。このとき次の話し手に話す義務が生じることになる。つまりこの会話は誰かに直接呼びかけたり質問したりすることによって次の話し手として他者を選択するやり方だといえる。

今度はAの発話を分析してみると「みたいな」をよく使用しているのはわかる。親に内緒で彼氏の家に泊まりに行く説明を「みたいな」をととても乱用しているようにフィールドワークから感じた。BとCから共感してもらいたいと思ってA自身の親とのやり取りをストレートに説明せず、BとCにも同じような経験をしたのではないか、また親に対してA

と同じ気持ちになったことがあるのではないのかと相手に通じているのか不安な時に和らげて、共感してもらいたいがために「みたいな」を多用していると感じる。

〈会話 2〉

藤女子大学の学生 3 人が大学校内で飲み会の予定を計画している場面

A 12月21日空けてほしいかもしれない

B つかバイトを16日まで休みにして卒論あるってすみませんってつって
でもあと何も書いてないから、いつ、どこ休みになるか分からない

C 何やるの？

A クリスマスパーティーやろう(↑)!!みたいなー

クリスマス？ 忘年会？

とりあえずなんか文総の子知ってる限りアドレス回して集めて

飲もー(↑)みたいなこと言ってて…

B 知ってる人にどんどん拡散してくださいみたいな(↑)

C えー楽しそう!!

A が飲み会の主催であり、B と C に提案しているシチュエーションである。はじめの A の「12月21日空けてほしいかもしれない」は B と C に押しつけがましく思われないうちに“空けてほしいかも”断定を避けるような言い回しをしている。これに対して B は「つか」を使って話を切り替えて自分のアルバイトで休みが取れるかどうかの話をする。この「つか（または“ていうか”）」もフィールドワークをしてきて若者の間でよく使われていた。

相手が質問を投げかけているとしても相手は何の返答もせず自分の話をことばかり伝えている。自分が発言したいがために「つか」「っていうか」を用いて無理やり自分の話に持って行く特徴があった。特に久しぶりに友人と会った際、最初に会話をし始める時、特に「ていうか」を使う方が多くみられた。

次の A の会話は単語の末尾を上げて話している。「クリスマスパーティーやろう(↑)」や「集めて飲もー(↑)」はテンションを上げて会話していて、パーティーに参加すると楽しい・盛り上がるという合図を示している。さらに A は女性特有の感情的に話している。

デボラ・タネン(2001)が男女のスピーチスタイルについて、自分の口にする言葉が相手の気持ちや人間関係に与える影響も意識していると述べている。女性は相手の感情も大いに配慮し「情報」の伝達自体を優先させる男たちに比べると表現は間接的になりやすいが、会話の中で言葉だけではなく心のやり取りもする。女性が親密性を構築する要素として最も重要だと言える。

次に来る B の発話は“拡散”という言葉が使われている。いままででは若者の言葉で拡散という言葉は会話であまり出てこない言葉だとおもうが最近ソーシャルネットサービスで有名な Twitter が流行し若者もユーザーとして利用する人が多く東日本大震災をきっかけに Twitter 上で頻繁に使用された“拡散希望”が由来となって会話の中で拡散という言葉を使ってより多くの友達に情報を広げようという意味で使用したとみられる。

おわりに

普段の何気ない日常生活において、相手とダイレクトにコミュニケーションを取ることにより生じるラポールは社会生活における重要な要素だと言える。徳井・榎本はコミュニケーションとは他者との意味を共有し、双方向に影響を及ぼし合っていくものである(2006:1)と述べている。若者の双方がお互いの会話スタイルを理解し合うことが良い影響を及ぼし合い仲を深めていくことがみられる。

2章で述べた若者特有のスピーチスタイルで「みたいな」「って感じ」などの“マサツ回避”のコミュニケーションが現代の若者に定着していることは会話分析により明らかになった。これは1章でタネンの調査で登場した Robin Lakoff のポイトネスに関連するルールの中で「1. 距離を置く、軽くお断りをする」に当てはまるように感じる。相手に押し付けないことがポライトネスだと考えるスタンスが2章の図1のコミュニケーションを円滑にするために必要なことのグラフの結果に「べったりしすぎない」「相手のことを否定しない」とでてくる。その相手と強い・濃い対人関係をもつことへの消極性に対応している。よって、若者の多くは会話の中で親しい相手であっても距離を置くようなコミュニケーションスタイルが定着しているよう見える。

「はじめに」で述べたように本論の仮説として、特徴があることを述べた。女性が共有するスピーチスタイルと若者のスピーチスタイルに共通するものがあり、仲間意識が生親密な関係性の構築を実際に女性が重要視するポライトネスと若者のスピーチスタイルが

似ている部分があり仮説は間違っていないのではないかと考えられる。実際女子大学生の会話は1時間以上当たり前に話していて話が尽きないことが多かった。その中で話が盛り上がると興奮して話す姿や、深刻な話をしている時には気持ち落ち着かせて話している姿が見受けられた。タネンが述べていたように女性の会話スタイルには感情が伴い若者特有の言葉遊びによって仲間意識が生まれ、信頼関係を構築する最も重要なスタイルだと言えるだろう。

引用・参考文献

- Deborah Tannen 『Conversational style : analyzing talk among friends』 Oxford University Press 2005
- Deborah Tannen 『That's Not What I Meant—なぜ言葉が伝わらないのか—』 金星堂 2006
- デボラ・タネン 田丸美寿々・金子雄一訳『どうして男は、そんな言い方 なんて女は、あんな話し方』 講談社 2001
- 井上史雄『日本語ウォッチング』 岩波新書 1998
- 齋藤孝『コミュニケーション力』 岩波新書 2004
- 小此木啓吾『モラトリアム人間の時代』 中央公論社 1978
- 栗原彬『やさしさのゆくえ—現代青年論』 筑摩書房 1981
- 中島梓『コミュニケーション不全症候群』 筑摩書房 1991
- 千石保『マサツ回避の世代』 PHP 1994
- 大平健『やさしさの精神病理』 岩波書店 1995
- 稲村博『機械親和性対人困難症』 弘文堂 1986
- 謝名元慶福「中学生・高校生の光と影—第二回「中学生・高校生の生活と意識」調査から」、『放送研究と調査』 第38巻第2号 1988
- 博報堂生活総合研究所『調査年報 1994 若者—まさつ回避世代』（本編）1994a
- 博報堂生活総合研究所『調査年報 1994 若者—まさつ回避世代』（資料編）1994b
- 辻大介『若者におけるコミュニケーションの様式変化—若者語のポストモダニティ—』 東京大学社会情報研究所紀要 51号 (pp.42-61) 1996

- Austin, J.L. 『 *How to Do Things with Words*, Oxford University Press』 1962
 =1978 坂本百大訳『言語と行為』, 大修館書店
- Habermas, J. 『Was heisst Universalpragmatik? 』 *Sprachpragmatik und Philosophie* (K.O.Apel hg.), Suhrkamp 1976
- Goffman, E. 『 *Frame Analysis*,』 Harper&Row 1974
- 米川明彦『若者語を科学する』 明治書院 1998
- 山口仲美『若者言葉に耳をすませば』 講談社 2007
- 米川明彦『現代若者ことば考』 丸善 1996
- 加藤主悦『携帯の普及に見る若者文化到来－現代若者言葉と老若共同参画の可能性－』 國文學 4月号、71頁 2008
- 好井裕明 他編『会話分析への招待』 世界思想社 1999
- 山田富秋『会話分析を始めよう』 上記収録
- 徳井厚子・榎本智子『対人関係構築のためのコミュニケーション入門』ひつじ書房 2006
- 吉田早希『日常会話におけるラポールの形成－男性のコミュニケーションを例に－』 卒業研究論文 藤女子大学文学部文化総合学科 2010
- 瀬沼文彰『若者ことばをフィールドワークする』 コミュニケーション科学 (22) 2005
 年3月10日
- 桑本裕二『若者ことばの発生と定着について』秋田工業高等専門学校研究紀要(38) 2003
 年2月28日
- 篠田信司『言葉遣いの“乱れ”を考える(上) 若者言葉の何が問題なのか』 東海教育研究所 1998
- 篠田信司『言葉遣いの“乱れ”を考える(下) 若者言葉の何が問題なのか』 東海教育研究所 1998
- 奥野真人『仲間意識を確かめるための道具--「若者言葉」考(高校生文化の変容と生徒指導の在り方)』 月刊高校教育 34号 2001